

ダニエル書 - 第六十三号

ミラーの図表を超えて：イスラム教、調査審判、そして最後の試練

Jeff Pippenger

2024-01-27

私たちは、「神はウィリアム・ミラーの心を預言へと向け、『ヨハネの黙示録』について彼に大いなる光をお与えになった」と知らされている。ところがミラーは、彼が起こされた時代の歴史的背景のために、『黙示録』第12章、第13章、第16章、第17章、第18章にある「大いなる光」を理解することが妨げられていた。というのも、それらの章は、彼の歴史的視点からは見えなかった預言的な諸王国の働きを示していたからである。

黙示録についてミラーに与えられた光は、教会、封印、そしてラツパに関するものであり、そのうち「三つの災い」とされる最後の三つのラツパが、ハバククの二つの表に示されている。黙示録においてミラーに与えられた「大いなる光」は、聖書預言におけるイスラムの役割に関するものである。しかし、その「大いなる光」でさえ、彼の時代背景によって限定されていた。

アジアの七つの教会は、使徒たちの時代から世の終わりに至るまで、教会が示す七つの姿において、そのあらゆる曲折、その繁栄と逆境のすべてをたどる、キリストの教会の歴史である。七つの封印は、教会に対して地上の権力と諸王が行った事柄と、同じ期間における神の民への守りの歴史である。七つのラツパは、地上、すなわちローマ帝国に下された、特異で重い七つの裁きの歴史である。そして七つの鉢は、教皇ローマに下された最後の七つの災いである。これらに交じって他にも多くの出来事があり、それらは支流のように織り込まれて預言という大河を満たし、ついにはすべてが永遠の大海へと注ぎ込んで終わる。

これは、私にとって、『黙示録』に記されたヨハネの預言の構想である。そして、この書を理解しようとする者は、神の言葉のほかの部分についても徹底した知識を備えていなければならない。この預言に用いられている象徴や隠喩は、すべてがこの書の中で説明されているわけではなく、他の預言書において見いだされ、聖書の他の箇所でも解き明かされるべきものである。ゆえに、いかなる部分を明確に知るためであっても、全体を学ぶようにと神が意図しておられることは明らかである。ウィリアム・ミラー『ミラーの講義』第2巻、第12講、178。

注目すべきは、ミラーが「最後の七つの災い」を教皇ローマへの七つの裁きとして理解していたことである。彼は、教皇ローマがやがて癒やされる致命的な傷を負わされたことを理解できなかった。彼は七つのラツパを「地上、すなわちローマ帝国に下された、特異で重大な七つの裁きの歴史」とであると認識していたが、異教ローマと教皇ローマの王国の区別を認識することはできなかった。したがって、最初の四つのラツパと最後の三つのラツパの区別を見る力は限られていた。

ミラーは、ローマに下された裁きが日曜日遵守の強制に対する神の応答であることを認識できなかった。というのも、ミラー派は当時なお日曜日に礼拝していたからである。ミ

ラーは、ラッパがローマに対する裁きであると認識した点では正しかったが、その裁きが下された具体的な理由や、最初の四つと最後の三つのラッパの区別についての理解は限定的であるか、ほとんど存在しなかった。そのような限定的な見解であっても、神の御手に導かれて作られた図表には、イスラムの三つの災いという「宝玉」がなお含まれており、これを改変してはならない。

啓かれた識別力により、預言の「賢い」学徒は、神が聖書を書いた聖なる人々に靈感を与えただけでなく、欽定訳聖書を翻訳した人々の働きも導かれ、さらに二つの聖なる図表の作成においても同じ種類の神的監督を用いられたと、神自らが明言しておられることを認識できる。

ミラーの第五・第六・第七のラッパ（イスラム）に関する「宝石」は、終わりの時代において十倍明るく輝く。なぜなら、それが最後の「真夜中の叫び」の主題を明らかにするからである。ミラー派の歴史における「真夜中の叫び」の主題は、預言的期間の終結の日付であった。この意味で、終わりの時代の「真夜中の叫び」のメッセージ（第三の災いであるイスラムのメッセージ）は、1844年10月22日という日付によって予表されてきた。ミラー派の歴史におけるその日付は、まもなく到来する日曜法を予表しており、1844年10月22日と日曜法の双方は、キリストの凱旋入城の結末であった十字架によって予表されていた。

ミラーの第五・第六・第七のラッパ（イスラム）に関する「宝石」は、終わりの時には十倍も明るく輝く。というのも、終末の改革運動の主題-第三のわざわいのイスラム-と一致するかたちでイスラムを特定しているからである。ゆえに、十四万四千人の最後の改革運動の主題として、それは、これまでの各改革運動の主題、すなわちキリストの改革運動における「復活」、ミラー派の歴史における「預言の時」、ダビデの改革運動における「神の箱」、モーセの改革運動における「契約」によって予表されてきた。

十字架の出来事であれ、1844年10月22日という日付であれ、あるいは改革運動の諸テーマであれ、当時の世代にとって、すべての日付や主題は生死を分ける試金石となる問いであった。ミラーの「イスラムの三つの災い」という「宝石」は、十人の乙女のたとえにおける「油」によって示されているように、生死を分ける試金石となる問いである。彼の夢の初めにミラーの宝石は太陽のように輝いていたが、夢の終わりにはそれらは「十倍も明るく」輝いた。ミラー派の歴史において、ミラーの宝石は灯油（ランプの油）のようなものであったが、今日ではその宝石はロケット燃料である！

ミラー派は、1840年8月11日に成就した、第二の災いにおけるイスラムに関する時の預言を理解し、正しく適用していた。しかし、第三の災い、すなわち第七のラッパについての彼らの理解では、第三の災いが聖書預言の第六の王国への裁きとして到来することを見通すことはできなかった。というのも、彼らには聖書預言の第五の王国すら見えておらず、ましてや第六の王国など見ていなかったからである。にもかかわらず、ミラーに与えられた黙示録に関する「大いなる光」は、終わりの時の「真夜中の叫び」において十倍も明るく輝くはずである。

ハバククの二つの板に表された真理は、本質的には過去の歴史において成就した真理である。これらの図表は、ミラーが導かれてまとめた時の預言に基づいており、それらの時

の預言はすべて1844年までに完結していた。これらの時の預言は終わりの時にさらに輝きを増す。というのも、ミラー派の歴史においてそうであったのと同様に、今日においてもそれらが正確であることが認められるからである。しかし、それらは終わりの時のための直接的な時期の予告を持ってはいない。それでもなお、それらは過去に示していた歴史が繰り返されることを指し示す預言的な型を与えているが、ミラーの宝石のうち幾つかについては、将来の予告が直接的に表されている。

1844年に始まった天の聖所におけるキリストの働きは、その働きが完了するまで続く。二千三百日の預言と、それによって示された清めの働きは、ホワイト夫人がウライ川とヒデケル川について述べているように、今なお「成就の途上にある」ので、その預言には世の終わりにおける成就がある。

ダニエルが神から受けた光は、この終わりの時代のために特に与えられたものであった。シナルの大河であるウライ川とヒッデケル川のほとりで彼が見た幻は、今や成就しつつあり、予言されたすべての出来事はまもなく成就する。『牧師たちへの証言』112。

二つの表に記されているダニエル書7章と8章の幻の一部は、まだ将来のことである。というのも、それらはどちらもキリストの聖所における働きを示しているからである。しかし、その二つの章における聖書の預言の諸王国の歴史は、教皇ローマが致命的な傷を受けるところで終わっている。『人手によらず山から切り出された』とある『石』と、ダニエル書2章の第八の王国は、いずれもまだ将来のことである。しかし、ダニエル書2章、7章、8章に関して図表に示されている事柄の大部分は、すでに成就している。

聖所におけるキリストの働きと、イスラムの第三の災いは、本質的にはミラライトの時代以後の預言的歴史を表す二つの主題である。これら二つのテーマに加えて、二つの図表を一つの線上に重ね合わせたときに型として示される終末の歴史がある。そうすると、第一の図表に示されている1843年の第一の失望は、第二の図表においてその訂正が見いだされる。両者を合わせることで、「七つの雷」の「隠された歴史」が生み出され、明らかにされるが、それは今、イエス・キリストの黙示の封印が解かれることと関連して、解き明かされつつある。

その「隠された歴史」は「真理」の上に築かれているが、この「真理」とは、組み合わせると「真理」という語になる三つのヘブライ文字のことである。その語はヘブライ文字の最初、十三番目、そして最後の文字から成り、イエスを真理としてだけでなく、アルファでありオメガである方としても表している。「隠された歴史」は失望に始まり失望に終わり、その中ほどには反逆がある。というのも、「十三」は反逆を表す数だからである。

第一の図表に描かれている1843年は、最初の失望と待延の時の到来を指し示している。待延の時は真夜中の叫びのメッセージの到来へとつながり、そこで愚かな乙女たちの反逆が明らかになる。その後、真夜中の叫びのメッセージは最後の失望に至るまで宣べ伝えられる。その真夜中の叫びの「隠された歴史」は、終わりの日々に（一字一句まで）繰り返される。

「私はしばしば、五人は賢く、五人は愚かであった十人の乙女のたとえを引き合いに出されます。このたとえは、この時代に対して特別な適用があるため、文字どおりにすでに成就してきており、これからも成就します。また、第三天使のメッセージと同様に、すでに成就しており、時の終わりまで現在の真理であり続けます。」 Review and Herald, 1890年8月19日

正しく理解すれば、前の陳述は、終わりの時代に愚かなおとめにも賢いおとめにもなりうる可能性がある唯一の集団は、失望を経験した集団の内部にいる人々であると指摘している。その失望こそが遅延の時を生み出し、「『一字一句に至るまで』成就してきており、また成就する」とされるたとえは、失望から始まるその遅延の時のあいだにおとめたちの内側で生じる影響を前提としている。都の通りで「二人の証人」を打ち倒し、彼らを死の谷で乾き切った死骨へと化したその失望は、2020年7月18日に起こった。概してアドベント主義は、その失望には関与していなかった。むしろ、彼らは「二人の証人」が通りに打ち倒されたまま横たわっているあいだ、失敗に終わった予言を祝った。「一字一句に至るまで」とは「一字一句に至るまで」という意味である。

ミラー派の歴史において、かつての契約の民（プロテスタント）は、1843年の失敗した予言（第一の失望）を喜び祝ったが、その時点でプロテスタントは彼らの試練の猶予期間の限界を越えた。その試練の時は、第二の災い（イスラム）に関する時の予言が成就し、黙示録10章の力ある天使が降りてきた1840年8月11日に始まっていた。プロテスタントは第一の失望において時の予言を退けた。誤った予言が、もはや真理を求めないための口実を彼らに与えたからである。ミラー派の歴史におけるすべての道標の主題は「時の予言」であった。

2001年9月11日、黙示録18章の御使いが、第三のわざわい（イスラム）に関する予言の成就に際して降りてきた。終わりの時代のすべての道標の主題はイスラムである。最初の失望は、かつての契約の民の清めの終わりを示している。というのも、その時、かつての契約の民には、もはや真理を求めないための口実が与えられたからである。こうして、終わりの時代の「乙女たち」に対する試みの時が始まった。御使いの降臨とともに始まった、かつての契約の民に対する試しは、最初の失望で終わったからである。したがって、乙女として表される者たちの試しが始まり、その試しの過程は最終的に、乙女たちが愚かなのか賢いのかを明らかにする。

最初の失望と最後の失望の間にあるのが、「真夜中の叫び」のメッセージである。ミラー派にとって「真夜中の叫び」のメッセージの主題は「時」であり、終わりの時代における「真夜中の叫び」のメッセージの主題は「イスラム」である。ミラーの夢では、彼は叫び（叫び声）によって目を覚まされ、そのとき彼の宝石はそれまでより十倍も明るく輝いた。図表にある宝石のうち、終わりの時の予言を直接に特定しているのは、イスラムと調査審判である。したがって、「真夜中の叫び」の「メッセージ」と、調査審判が表す「経験」に関する試験は、かつての契約の民のためではなく、自らを終わりの時の乙女たちであると公言する者たちのためのものである。

二つの図表を重ね合わせて得られる図解は、最初の失望から最後の失望に至る歴史を示すものであり、七つの雷の「隠された歴史」が進行している時に、調査審判の最終の働

きが成し遂げられつつあることを明らかにしている。その最終の働きとは十四万四千人の封印であり、それはダニエル書九章の「艱難の時」、黙示録十一章の諸国民の怒りの時、黙示録七章の「四つの風」が抑えられている時、イザヤ書二十七章の「東風の日に荒い風がとどめられる」時、そして世界に死と破壊をもたらそうとして解き放たれようとしている「怒れる馬」が抑制されている時に行われる。これらすべての預言的証言は、聖なる図表に示されているとおり、第三の災いとしてのイスラムを表している。

ハバクク二つの聖なる図表が、図表の出版時点から見て将来の出来事を特に扱っている三つの主要要素は、十四万四千人の封印、イスラム、そして十人の乙女のたとえの成就である。これらの図表は、「経験」と「メッセージ」の双方に対して行われる試しと封印の過程を示している。愚かな乙女に必要な経験は「あなたがたのうちにおられるキリスト、栄光の望み」であり、それは十四万四千人によって示される完全を表している。

すなわち、世々代々にわたって隠されていた奥義が、今や神の聖徒たちに明らかにされた。神は、異邦人の中にあるこの奥義の栄光の豊かさの何たるかを、彼らに知らせようとしたのである。すなわち、それは、あなたがたの内におられるキリスト、栄光の望みである。私たちはこの方を宣べ伝え、あらゆる知恵をもってすべての人を戒め、すべての人を教えている。それは、すべての人をキリスト・イエスにあって完全な者として立たせるためである。コロサイの信徒への手紙 1:26-28

十四万四千人は、「捕囚」から出てきた人々の集団として表されている。黙示録で直接的に示されているその捕囚とは、黙示録十一章に描かれているように、三日半のあいだ街路で死んだままにされるという捕囚である。象徴的な死の「捕囚」は、レビ記二十六章の「七つの時」を表しており、その捕囚には、ダニエル書九章のダニエルの祈りに示されているように、悔い改めの現れが求められる。

死んで干からびた骨がよみがえらされると、彼らはただちに「旗印」として掲げられる。死のうちにあつて彼らは、栄光の望みであるキリストを内に持っていなかった。彼らに求められた悔い改めの一部は、彼らが神に逆らって歩んできたこと、そして神もまた彼らに逆らって歩んでこられたことを認めることであつた。預言によって示された要件を満たすと、キリストは「突然ご自分の宮に来られ」、その後掲げられる旗印の一員となるために必要な「経験」が与えられる。

二つの図表を合わせて見るときに示されるその「経験」は、天の聖所におけるキリストの最終の働きによって成就される。その「経験」は、「mareh」の幻、すなわち「現れ」の幻によって表される。必要とされる「メッセージ」は、預言的歴史の「chazon」の幻である。その「メッセージ」は、第三の「わざわい」のイスラムによつてもたらされる、反逆の世界に対する神の差し迫った裁きのメッセージであるとされている。

1856年、主はアドベンチズムにおいて霊的エルサレムの再建を完成させようとした。1798年から1844年にかけての三天使の到来の下で、ミラー派の神殿は、ハバクク書2章を成就した二つの先駆的預言図表（1843年と1850年）に記された預言的真理、すなわちミラーの夢で「宝石」として示された基礎の上に築かれていた。その後、主はご自分の民に第七日安息日の律法という城壁を築かせ、古代イスラエルの「古き道」へと彼らに戻して、「歩むべき街路」の工事を仕上げさせようとした。しかし、その古き道には、彼らを試

し、ふるい分けるために用意された教理、すなわち予言が含まれていた。1863年、アドベントイズムは「七つの時」の試みを通過できず、ラオデキヤの荒野をさまよい始めた。

1844年10月22日は、まもなく到来する日曜法を象徴している。そして日曜法のときには、ダニエルが示したように、苦難の時代に街路と城壁を仕上げる四十九年に象徴されるわざが成就する。

それゆえ知り、悟れ。エルサレムを復興し再建するようという命令が出されてから、メシアなる君に至るまで、七週と六十二週である。広場は再び建てられ、城壁もまた、苦難の時にも再建される。ダニエル 9章25節

すべての預言者は互いに一致しており、私たちが検討してきた『初期の著作』の一節では、ダニエル書にある「苦難の時」も特定されている。

その時、救いの働きが終わろうとしている間に、地上には患難が臨み、諸国民は怒るが、第三天使の働きを妨げないように抑えられる。その時、「後の雨」、すなわち主の御前からの潤いが下り、第三天使の大いなる叫びに力を与え、最後の七つの災いが注ぎ出される時期に堅く立てよう聖徒たちを備える。『初期の著作』85。

次の記事でこの研究を続けます。

真理を唱える者たちがサタンに仕えている限り、彼の地獄のような影が、神と天を見る彼らの目を遮ってしまう。彼らは初めの愛を失った者ようになる。彼らは永遠の現実を見ることができない。神が私たちのために備えておられるものは、ゼカリヤ書の3章と4章、そして4章12節から14節に表されている。『わたしはさらに答えて彼に言った、「二つの金の管を通して、自らのうちから金の油を注ぎ出しているあの二本のオリーブの枝は何ですか。」

彼はわたしに答えて言った、「これらが何であるか、あなたは知らないのか。」わたしは言った、「いいえ、主よ。」すると彼は言った、「これらは、全地の主のそばに立つ二人の油注がれた者である。」』

主はあらゆる備えに満ちておられる。主に手段の不足はない。私たちの信仰の欠如、地上的な心、軽薄な言葉、会話に現れる不信のために、暗い影が私たちを取り巻くのである。キリストは、全く麗しい方、万の中にひとときわ優れた方として、言葉や品性に現されていない。魂が虚栄に向かって自らを高ぶらせることに満足しているとき、主の御霊はそのためにほとんど何もしてやることができない。近視眼の私たちは影こそ見ても、その彼方の栄光を見ることができない。御使いたちは四方の風を押さえている。四方の風は、怒れる馬に警えられ、手綱を振り切って地の全面を駆けめぐろうとし、その跡に滅びと死をもたらそうとしている。

私たちは永遠の世界のまさに瀬戸際で眠っていようというのか。私たちは鈍く、冷たく、死んだようになってしまうのか。ああ、教会において神の霊と息がその民に吹き込まれ、彼らが自らの足で立ち上がって生きることができればよいのだが。私たちは、道は狭く、門は狭いのだと知らなければならない。しかし、その狭い門を通り抜けると、その広がりには限りない。Manuscript Releases, 第20巻, 217頁。